

から出土する人骨や動物骨の調査研究も併わせ行ない、当地方の地域研究の各グループに貢献している。

## 研究概要

### 1) 霊長類各分類群の比較形態学的研究

1. ヒトおよび霊長類下顎骨の機能的・形態学的研究
2. 霊長類の性的二型の形態学的・行動学的分析
3. 行動の開発因となる形質の形態学的・系統発生学的研究

### 2) スマトラにおける現存霊長類の形態学的研究

江原昭善・相見 満・  
アムシール・パカル(アンダラス大学)

### 3) エチオピアにおける鮮新世-最新世霊長類の総合研究

江原昭善・野上裕生  
馬場悠夫(独協医大)

### 4) 東海地方先史遺跡出土の人骨・動物骨の研究

江原昭善・相見 満・木下 実

### 5) 硬組織の形態学的研究

野上 裕 生

1. 歯牙・骨組織等の電子顕微鏡像に基づく形態研究
2. 家畜および野生種におけるエナメル質の発達変異
- 6) インドネシア国スマトラ島における第四紀地史研究

野上 裕 生

### 7) インドネシア国ジャワ島における第四紀哺乳類の研究

相 見 満

### 8) 第三紀食虫類・原猿類および有袋類の研究

瀬戸口 烈 司

1. 南米出土化石について
2. アジア出土化石について
3. 南・北アメリカ大陸とヨーロッパ大陸出土の第三紀食虫類化石の対比

## 総 説

- 1) 江原昭善(1979): 身ぶり言葉と話し言葉と。  
平凡社アニマ
- 2) 江原昭善(1979): オナガザル類のルーツを求めて。モンキー 18 巻 168 号

3) 江原昭善(1980): 人類の進化と北京原人。  
自然科学と博物館第 47 巻第 2 号

4) 瀬戸口烈司(1979): オーストラリアに直立猿人がいた可能性 — 生物地理学的考察。

生物科学 Vol. 31, No. 4, 岩波書店

5) 相見 満・瀬戸口烈司他(1980): 蛋白分解酵素を用いたサル類骨格標本作製法の開発。  
京大霊長類研究所

## 学 会 発 表

1) 江原昭善(1980): 旧世界ザル各分類群の下顎骨の形態比較。第84回日本解剖学会。

2) 江原昭善(1980): 霊長類頭骨の基本構造と食性への適応。

第9回ホミニゼーション研究会

3) 渡辺直経・相見 満・鈴木正男・松浦秀治(1979): ジャワ・サンギランの含人類化石層

4) 瀬戸口烈司・渡辺 毅・毛利俊雄(1980): 南米コロンビアで発見されたスタートニヤ(中新世後期)の上顎臼歯について。

第24回プリマテス研究会

## 報告その他

1) 江原昭善(1980): 霊長類とくにニホンザルの「て」の使用。昭和53・54年度科研費補助金総合A「適応動作の生理学的・行動学的研究」研究成果報告書

2) 江原昭善・相見 満・木下 実(1980): 愛知県西尾市枯木宮貝塚出土人骨および動物骨について。中間報告書。西尾市教育委員会。

## 幸島野外観察施設

岩本光雄(施設長・兼)・  
森 明雄

幸島野外観察施設も新設されて十余年を経過し、安定した運営が続けている。幸島生息のニホンザルの群れの総数は、後述のマキグループも含め、1979年3月末現在97頭であり、そのほかに2頭(ボーゼ, ハト)ほどのソリタリーがいるものとみられる。また、1980年3月末現在は95頭のほか、3頭(ノソ, ボーゼ, ノロマ)ほどのソリタリー

がいるものとみられる。この間、6頭が出生したが、うち3頭が乳児死亡、ほかに死亡や群れ落ちがあって、ポピュレーションの変動は少ない。第1位リーダーは20余才のナベであるが、マキを中心として別行動をとるグループがいる(1979年8月時の約7頭から、1980年8月時の約18頭まで、グループが大きくなっている)。

サルへの給餌は個体確認や体重測定時のほかはなるべく差し控えており、そのため、餌づけされた群れとしては、自然状態の行動をよく保持した状態に保たれている。幸島に生息しうるサルの総数は100頭までが適当と考えているが、現在のところ、特に栄養状態の悪化は見られない。

なお、本施設設立以前より多年にわたり、ニホンザル幸島群の研究者がお世話になってきた漁師の磯崎政富氏が1980年2月16日朝、突然逝去された。記して御冥福をお祈りする次第である。

1979年秋の台風で施設内の仮設小屋が崩壊する等の被害を受けたが、年度末までに大体の復旧が行われた。従来より研究者に切望されている宿泊、研究整理等のための建物増築を含め、1980年度内になお、施設の整備をはかって行きたい。台風等による影響として、施設がわと幸島との間の陸続きの頻度、程度が減少しており、1980年度は渡島に船を使用する率が増加する見込である。

1979年度の研究関係の来訪者は98名、延べ655日であった。なお、施設常駐の森明雄助手は1979年8月以来、西アフリカへ研究調査のため1年間の予定で出張中であり、施設には山口直嗣、冠地富士男の両技官のほか、囑託(非常勤講師)の三戸サツエが常駐している。

## 研究概要

- 1) Mori, A. (1979): An experiment on the relation between the feeding speed and the caloric intake through leaf eating in Japanese monkeys. *Primates*, 20: 185-195.
- 2) Mori, A. (1979): Analysis of population changes by measurement of body weight in Koshima troop of Japanese monkeys. *Primates*, 20: 371-397.

## サル類保健飼育管理施設

千葉敏郎・松林清明<sup>1)</sup>  
後藤俊二・松林伸子

前年度の年報(Vol. 9, 1979)で報じたように、昭和54年度概算要求において繁殖コロニー設置が認められた。要求案の骨子は前報に述べたからここでは省略する。予算が内示されたのは54年3月頃であるが、これに僅かに先立って、繁殖コロニー実行委員会(委員長・千葉敏郎)が所内に設けられ、コロニー建設の基本的実施計画の策定に当たることになった。この委員会はその後、所内の各種委員会とも協議を重ね、さらに実施計画案の大要について全所員に対する説明会を開くなどして、研究所周辺地域に対する影響をも含めた環境問題、将来建設予定の情報資料センターとの関係などについても多数の意見を徴しつつ最終的プランの確定につとめた。この間に、京大本部との頻繁な交渉が行われたことは勿論である。結局、最終案として繁殖母群放飼場(総面積2,437 $m^2$ )を4区画に分けてここに総数約120頭のアカゲザル・ニホンザルを収容し、ここで生まれた子ザルを育成舎(総面積528 $m^2$ )に移し、集中的に管理することに落ち着いた。着工は当初10月初が予定されていたが、諸事情により大巾に遅れ結局12月下旬に至って本格的工事が始まった。それに伴い完成予定も、当初の3月末が55年6月に延期され、竣工検査が行われたのは6月23日であった。

研究用サルの自家繁殖態勢の充実、殆ど研究所開設の時点以来、いわば積年の願望であったが、ここに少なくともその容れ物だけは成った訳である。今後どのようにしてその中身を調達し、いかにしてこれを充実・発展せしめるかが、実はより大きな困難な課題であることは言う迄もない。年毎に60頭の健康な子ザルを育成し、これを確実に研究用に供するようになる迄には、少なくとも後数年間を要する筈である。幸いにして、コロニー新設に伴って技官定員の1名増加と、運営費の増額も認められたので、大いに奮起して今後の発展を期したい。

科研費によって購入されたサルの総数は、総保

1) 教務職員